

「道」(Tao) と ロ ゴ ス

— 比較文化論の一 —

梅 崎 光 生

(要旨) 日本を含めて東洋人は、古来、自然を母胎として生まれ、自然に随順して生き、自然にかえろという想念を以て生きて来たのに対し、西洋人はあくまで人間中心で、自然は人間の為に存在し、人間によって支配され、征服さるべきものとして早くから文化を築いて来た。その原型は既に古代における万物の始源のとらえ方にあらわれている。東洋の場合、主として老子の「道」について考察し、それは論理の対象でなく、その体得は「行」にあり、西洋にあつてはキリスト教における天地創造の神はロゴスとしてとらえられているところに両者の違いがあることを示した。
(それが具体的にどのような文化形態の相違となつて現われるかは次の問題である。)

一

東西文化の本質的な差異を明らかにするには、多角的な視点が必要とするであらう。今ここには世界の始源についての発想を手がかりにして両者の基本的な思考形態の相違を考察してみようと思う。

哲学は万物の *being* を始めて問題にしたターレスに始まるなどの哲学史も説いており、それはそれで一応納得できる。(一応といったのは東洋にも古くから哲学があったからである) それ以後続いた広義のヘレニズム哲学は簡単にいつてロゴスの哲学(後述)といつてよいで

あらう。やがて神による宇宙創造を始源とするヘブライズムが入つて来て、教父哲学、スコラ哲学などに於て理論体系としての両者の接合が行われた。⁽¹⁾ 近代以後の西洋哲学は、科学を媒介とするキリスト教との対決が大きな課題となつて流れているといえよう。
東洋に於てははじめから、(莊子に於てみる如く)⁽²⁾ ロゴスを無視、あるいは否定さえした。そして万物は神の創造ではなく、逆だったのである。

わが古事記には序の冒頭に次の記述がある。

夫混沌元既凝。氣象未効。無名無為。誰知其形。

(3) 混沌の元気が凝って、気も象も現われなかった時は、名もなく、為もなく、形も分らなかつた。やがて天地が分れ、三神、即ち天之御主、高御産巢日、神産巢日が生ずるのである。

この三神はヘブライズムに於ける唯一絶対の創造神エホバとは異なり、逆にいわば自然から生れて来たのであつた。そしてそれが「造化之首」即ち万物成生のはじめなのである。続いて「陰陽斯開。二靈為群品之祖」即ち陰陽が開けて、伊邪那岐、伊邪那美の二神が万物の祖となつた。「多陀用幣流之國」を「修理固成」して「淤能碁呂島」を造り、ここで交合の結果、日本国土を次々に生む、という順序になる。

それを逆にさかのぼってゆけば「究極者」、つまり、光あれと言ひ給いければ光ありき、といったような絶対者は無いのである。この点について和辻哲郎氏は「無限に深い神秘そのものは決して限定されることのない背後の力として神々を神々たらしめつつも、それ自身ついに神とせられることはなかつた。究極者は一切の有るところの神々の根源でありつつ、それ自身いかなる神でもない。言いかえれば神々の根源は決して神として有るものにはならないところのもの、すなわち神聖なる無である。」と述べている。(4)

無い、というのを名詞化すれば「無」であり、それが神々を生み出した。「無」はとらえ難いものであるが、それを形象化すれば「自然」ということになる。我々は自然から生れ、自然にかえる。これが日本

人の思考型なのである。所詮、神々も人間なのであつた。

もう一つ、究極者が無であるということは、パースペクティブを変えると、空っぽであつたということにもなる。日本民族はその中に仏教を取り入れ、咀しゃくし、日本的なものに変えてしまった。キリシタンも儒教もとりのいれ、いつの間にか日本化してしまつた。そして日本民族はそれらを自然な形で融和する術も心得ていた。神道の神八幡と仏教の修行者菩薩を重ね合わせて八幡大菩薩として怪しまないし、隠れキリシタンはひそかにマリア観音をつくつて拝んだのであつた。

こういう現象は西洋には見られない。キリスト教かイスラム教か、二者択一であり、同じキリスト教でも、カトリックとプロテスタントは、時には血で血を洗う抗争を行なつた。(5)これは日本人には理解し難い現象なのである。

ところで前記古事記の冒頭の語句については、古来道家、とくに老子からの借用が云々される。この点について本居宣長は、老子の説と古のまことの道は似ていない、たまたま似た所があるのを捉えて老子の説に依つたのだとするのは愚かだと反撥している。(6)

古事記がつくられたのは七十二年(和銅五年)であり、小野妹子が遣随使として中国に赴き(六〇七)多くの詩文をもたらししてから百年たつている。老子との間に似た点があつても、発想そのものは日本型のものであることは、宣長をまたなくても言えるであらう。

二

次にわれわれは老子に眼を転じよう。

老子における万物の始源、即ち「先天地生」ものは混沌として形容し難く、感覚で捉えることはできぬ。他に依存せぬ独立の存在で、そのはたらきは時空を超えている。「可似為天下母。吾不知其名。字之曰道。」⁽⁷⁾名づけられないから、かりに道「道」というのである。これは万物の創成をロゴスとしてとらえようとする西洋的思考とは対蹠的である。

右は老子道徳経二五章からの引用であるが、同一章に、前記古事記にあった「無名」という表現がある。即ち「道可道。非常道。名可名。非常名。無名天地之始。有名万物之母。」

天地の始、すなわち万物の始源は惚恍（一四章）として捉えようがなく、名づけようもないので、字して道といったのであるが、それから先は名づけようがあるという。古事記の場合、それが三神となったのであるが、だからといって古事記で老子の説に従ったとするのは早計であらう。両方が東洋的発想として共通点をもったとすべきである。

「はじめに混沌ありき」という東洋的発想はインドに於ても見られる。「マヌ法典」⁽⁸⁾第一章には「この（宇宙）は認識し難く、特徴なく理性もて理解し難く、識別し難く、あたかも深き眠りに陥れる如く

道とロゴス（梅崎光生）

闇黒の状態にありき」⁽⁹⁾その中から自在神が闇黒を排して現われ、五
大即ち地・水・火・風・空を顕現せしめた、となっている。

つまり世界のはじめは唯一超越神の創造ではなかったのである。

老子道徳経を見ると〈道〉は世界の始源という意味の他にもっと広い意味をもっていることが分る。即ち第二は「生成の原理」である。
（以下、原文は略して、訳文のみ述べることにする。）

「〈道〉はうつろ「沖」で「無」としかいいようのないものであるが、そのはたらきは無限である。深遠で万物はその奥底から湧き出るかに見える。——〈道〉は何から生じたものでもない。それは万物を主宰する力の根元としかいえない」（第四章）また、

「万物はひとしく生々発展しているが、その運動は循環としてその現象以前の状態に戻る。草木は茂り栄えるが、やがてはみなその根に戻る。——根元に返ることは自然の法則であり、それは宇宙を貫く法則「常」である。この法則を知ることが明知である」（第十六章）この明知をさかのぼってゆけば〈道〉に合致することになる、と説く。即ち始源を静とすれば、これは動の面をあらわしているといえよう。しかもそこには対立の統一という弁証法がはたらいっている。

「根元たる道から一が生まれ、一から二が生まれ、二から三が生まれ、⁽¹⁰⁾三から万物が生まれる。万物は陰と陽と、この両者を結びつける力とから或る。」（第四章）更に、「有無、難易、長短、音声等の対立概念は相対的なものであり、相互に連関し合い、限定し合い、転化

し合つて、ひとつの統一をなしている」(第二章)

これらの表現は、西洋流の理づめの論理的展開ではなく、ヘーゲルが客観的弁証法の祖とした古代ギリシャ、ゼノンの如き鋭利な論理はない。ゼノンとはよく知られる如く、「飛矢の原理」「アキレスと亀」等の論法で「動」を否定し、また同じく「多」をも否定したが、それはロゴスで以て現実の世界の矛盾を剔抉したものであった。むしろもう一人の弁証法の祖ヘラクレイトスの断片的に残っていることばの方が老子に似通つた趣があるが、しかし例えば「戦は万物の父」にしても、後に述べる如く、「ロゴスに従つて」という前提があるのである。老子の場合、ある種の直観によつてじかに存在の始源に迫り、そこから東洋風の論理を演繹して来るのである。

しかも〈道〉は無欲であり、(第三章)「天地は永遠である。それは天地が生きようと欲しないからだ。」(第七章)これはショーペンハウエルの「生への意志」⁽¹²⁾ Wille zum Leben ないしニーチェの「力への意志」Wille zur Macht⁽¹²⁾ の思想と対蹠的である。西洋の思想は人間を中心にし、それを自然あるいは万物に投影するという発想あるいは思考方法をもつのである。

〈道〉については「世界の始源」「生成の原理」のほかに第三の性格を指摘することができる。「普遍存在としての道はかすかでおぼろ「惟恍惟惚」である。捉えどころのないその底に物象がひそんでいる。奥深く探りがたいその底にエネルギー「精」が潜んでいる。そのエネル

ギーは不滅である。そこに確固たる法則がある。太古より今日に至るまで〈道〉は絶えることなく存在し、万物を統括している「閼衆甫」。

(第二章)

いわば宇宙に遍満するエネルギーという性格である。これはヨガでいうプラナーナ (Prana) に相当するものと考えられる。プラナーナについて本山博氏は次のように説明している。⁽¹³⁾

「プラナーナはヨガでは宇宙に遍満している形成力、生命力といっている。——物理的エネルギーよりも高い宇宙に遍満するエネルギーである。このプラナーナは身体形成の根元力であり、身体における生理的、物理的エネルギーはその物理的エネルギーへ転化せしめられたものと近代のヨガは説明する」⁽¹⁴⁾

ヨガは独特の坐法、呼吸法で精神統一、瞑想によつて宇宙エネルギーとしてのプラナーナを吸い取り、それによつて真我 (プルシャ) の発現を目指す行である。ウパニシャッドの表現によれば、我の本体であるアートマンを宇宙の最高原理ブラフマンに合一させることである⁽¹⁵⁾ が、このブラフマンは老子における〈道〉に相当するものと考えられる。

釈迦は六年間の苦行の後ヨガの瞑想によつて悟りを開き、この行がのち禪宗の坐禅に於て生かされたのであるが、老子は如何にして〈道〉を知ったのであろうか。

前記第二十一章の最後は「我何を以て衆甫の然るを知るや。此れを

以てなり。」とあり、「此れ」ははっきりしないが小川環樹氏の如く「内的直観」と解すれば、⁽¹⁶⁾(ウエイリイも同解釈) 老子に繰返し出てくる無為、無心とかかわりがあると考えられる。

第一〇章には〈道〉を体得する方法として次のような表現がある。

「載營魄抱一、能無離乎、專氣致柔、能嬰児乎。滌除玄覽、能無疵乎。

——天門開闢、能為雌乎。明白四達、能無知乎。」

難解で、解釈は諸説まちまちであるが、筆者は〈道〉の体得について述べたものとして、次のように解する。

「まよえる魂を統一し、そこから離れないようにできるか。呼吸をこらし、やわらかにして、赤ん坊のようにできるか。玄覽をぬぐい去って曇らないようにできるか。天門の開閉にあたって、受け身に徹しられるか。心をあらゆる所にゆきわたらせて、しかも無知でおられるか。⁽¹⁷⁾」

右は方法論⁽¹⁸⁾というよりは、それについての暗示である。その結果として第四十七章には次のように述べている。

「〈道〉を体得したなら、外に出ずともおのずと天下の動静が判り、外を見ずとも、おのずと天体の運行が判る。ところが知識を外に求めて駆け廻れば廻るほど、ますます知識はあやふやになる。だから〈道〉を体得した聖人は、外物に頼らずに物事を理解し、感覚に訴えずに物事を識別し、知ろうと努めず無為を守って知のはたらきを完全に示す。」

これはある種の超常能力の発現を示唆しているが、ヨガ行の結果としての同能力の開発も、ヨガストラに記載されている。⁽¹⁹⁾

右の文中、聖人とは無為の境に至れる人であり、無為とは〈道〉を体得することである。それは〈知〉を棄てることによって始めて可能であり、〈行〉によるほかないことが示唆されている。

三

次に西洋の場合であるが、その前に科学の発達した現代において、宇宙物理学者たちは万物の始源についてどう考えているかに触れておこう。

かつてニュートン物理学の時代は存在の始源は捉えようがなく、強いて追究しようとすれば、カントの所謂二律背反⁽²⁰⁾に逢着するほかなかった。宇宙の始源が問題になって来たのは、アインシュタインの相対性論による宇宙膨脹説が観測によって確かめられて以後である。

宇宙物理学者たちの所見は概ね次の如くである。⁽²¹⁾

宇宙の膨脹が事実ならば、初めは凝縮していた筈であり、いつどういう形で膨脹が始まったかということが問題になる。

原始宇宙は今から約百八十億年前に爆発し膨脹を始めたが、それ以前の状態および、爆発の原因はわからない。ただ爆発したときの宇宙は素粒子も存在しないような超高温、超高密度の世界であったという。爆発して膨脹を始めると宇宙の密度が低下し、素粒子が生まれ

た。数分後には陽子と中性子が結合して重水素イオンができ、それらの結合でヘリウムイオンなどがつくられるようになった。

一日程たつと宇宙の温度は一億度くらいに下った。ガモフはこの頃の状態をさして「光の海の中に物質が漂っていた」と説明している。

つまり光の方が他の物質より重かったのである。爆発から十万年後には宇宙は約一万度になり、イオンと電子が結合して電氣的には中性の水素やヘリウムが出来た。この頃すき間を見つけた光が直進するようになり、宇宙は透明な明るい世界となった。やがて宇宙のあちこちに濃いガス雲が生まれ、それが今の星雲の原形となった。

大体以上の如くであるが、附言すると、宇宙が膨張しつつあるといっても、現宇宙外に空間があるというのではない。この宇宙は果てしはないが有限であり、広さは計算されている。それには三次限の空間に時間の軸を加えた四次元の時空を想定しなければならぬ。いま巨大な球の表面を二次元空間とし、そこから類推すれば、球が膨張しつつあるとすれば、それは球の半径即ち第三の軸の方向に沿ってであり、同じくわれわれの宇宙が膨張するというのは第四の軸すなわち時間軸に沿ってであると考えられる。このように考えると宇宙の膨張と時間の経過は一義的に結びついており、膨張開始以前は「時間」はなく、爆発と同時に「時間」が生まれ、将来宇宙が平衡状態となり膨張を止めたと仮定すれば、その瞬間に「時間」はとまるということになる。「時間」が無ければ一切の生起はなく現象もありえない。即ち宇宙の

膨張開始以前は何かがあったにせよ、われわれには掴めない、いわば「無」があったということになる。更に言えばこの場合「以前」という言葉も意味をなさない。それは時間の継起を前提とする言葉だからである。時間、物質のないある不明の状態から、その三者が出現したことになる。換言すればそれが宇宙の創成であり、開闢である。そしてそれが如何にして生起したかも不明である。

宇宙の始源について現代物理学者の推論および筆者の「時間」についての所見を述べたのは、これらがある所まで科学的探究の対象たり得るといふことと、それらが前記古事記の冒頭、老子の叙述と意外な類似点をもつからである。

四

西洋にもいくつかの宇宙創成の神話がある。例えばメソポタミアのエヌマ・エリシュ (Enuma elish) そのギリシャ版ともいべきヘシオドスの「神統記」その他である。しかしここで問題にするのは神話(神々の系譜など)ではなく「存在の始源」のとらえ方である。とすればわれわれは旧約の天地創造及び新約の「はじめにロゴスありき」をとり上げざるをえず、その前にヘラクレイトスのロゴスを問題にせざるを得ぬ。

ヘラクレイトスの残された断片に次の叙述がある。「すべてのものにとって同じこの世界(コスモス)、これは神々や如何なる人間がつ

くったものでもなく、過去、現在、将来を通じて常に生きている火なのである。」(30)「火が転化してまず海となり、海が転化して半分は大地となり、他の半分は竜巻となる」(31)即ちヘラクレイトスにあっては「生ける火」は変転しながら永遠に存在するものであり、従って彼にあっては存在は始源をもたないことになる。この点において彼は「多くの人々から師と仰がれる」(57)ヘシオドス、「一番の勉強家——しかし嘘つきの元祖」(129・81)ピタゴラス、あるいはホメロス等と袂を分つのである。

ところでヘラクレイトスの断片には次のような個所がある、とG・トムソンは言う。⁽²³⁾「私にではなく、私のロゴスに耳を傾けて、万物は一つであることを認める者は知恵ある者である。このロゴス、それは永遠にあるが、人々はそれを聞かない前にも、初めてそれを聞いてからもなお、全くそれを理解しない。万物はこのロゴスに従って生じるのである。」

トムソンによると、ヘラクレイトスの言うロゴスに三つの意味、即ち言葉、理性、比率があるという。はじめの二つは一般にいわれることであるが、第三の比率は「諸元素間の交換の比率」を意味する。既に触れたようにヘラクレイトスに於ては「万物は流転」し、その原動力として「戦は万物の父」という弁証法が用意されているが、これは対立物の統一であり、対立物とは例えば、昼と夜、夏と冬、戦争と平和、満腹と飢餓の如きで、これらを諸元素という。トムソンは次のよ

うに述べる。「ロゴスは一方においてはこれら諸元素の交換の比率、あるいは更に一般的には対立物の相互浸透の法則であり、他方においてはこの法則の理解であるといえよう。——宇宙を精神と物質との有機的統一体とみるこの把握の仕方、同じくロゴスという語の意味の一つであったところの特殊の理性を前提としている。」

この所論の細かい所は問題を残すとはいえ、傍点の部分は正鵠を射ているといえよう。要するに変化の背後にある原理はロゴスは理性なのであり、大きくは世界理性なのである。

五

旧約聖書創世記には二つの創造史があり(第二章4aまでと以降)別の伝承に基づくものとされるが、天地創造はその第一である。「はじめに神は天と地をつくられた。地は形なく空しいもので、やみは深淵をおおい、水の上に神の霊がただよっていた。」⁽²⁴⁾

はじめ「不明のもの」があった、というのは東洋的発想で、それはたまたま現代宇宙物理学者たちの推論とも一致するが、旧約の場合、はじめから神の存在が前提されている。問題は次の個所である。

「神が〈光あれ〉と言われると光があった。神はその光を見てよいとされた。神は光とやみを分けて光を〈昼〉と名づけ、やみを〈夜〉と名づけられた。そして夕となり朝となつて一日が過ぎた。」

第二日以下も同じであるが、ものに存在を与えているのは神のへこ

とば)即ち「―あれ」という命令なのである。即ち神の(ことば)即存在である。そこでヨハネ伝の「はじめにことば(ロゴス)ありき。」が出て来る。

キリスト教はイエスが神の子であり、処女マリアによって降誕し、人間の罪のあがないとして十字架にかかり、三日目によりがえり、昇天して神の右に坐した、即ちイエスはキリストであるという信仰によって成り立つ。ヨハネは神の子イエス・キリストにロゴスというギリシヤ的概念をあてる。「かれ(ロゴス)は神と共にあり、万物はかれによってつくられた。」そしてそのロゴス(みことば)は「肉体となつて私たちのうちに住まわれた。私たちはその栄光を見た。それはおん独子としておん父から受けられた栄光であつて、かれは恩寵と真理とにみちておられた。」⁽²⁵⁾

かくてヘブライズムとヘレニズムの結合としてのキリスト教が成立する。

ロゴスとして捉えられた神は、実は人間のロゴスの投影ではなかったのか、全能の神は実は人間が自らの理想像として自らを疎外した虚像なのではないか。このことを指摘したのはフォイエルバッハであり、また「おん父」――天にましますわれらが父――は家父長へのコンプレックスの土台の上に立てられた幻想であることを指摘したのはフロイトであつた。

人間の自然からの自立――ヒューマニズム――は古代ギリシヤ以

来、西洋の思想の一つの基調であつた。それは自然が人間に対して従順であつたことから人間は自然の支配者という形になつたことに起因するとも考えられる。⁽²⁶⁾ 食用にする為に獣や魚を切り裂く如く、人間は支配下におかれた自然を鋭利なメス、即ち理性で解剖し始めた。それがイオニアに発した自然哲学である。これが砂漠の民であつたイスラエル人が自然との峻烈な戦いの果てに獲得した神の命、汝ら「地を治め、海の魚、空の鳥、地を這うすべての生き物を治めよ」というヘブライ思想を受け容れる素地となつた。神はロゴスを含む三位一体であるという非論理の論理が形成された。

東洋の場合、人間が自然より生まれ、自然にかえり、その間自然に随順する生き方をしたのは、人間が対抗しえない苛酷なモンスーンの風土によって育かれた性格ともいえよう。というのは例えば古代イオニアで哲学が発生したのは商工業の発達に起因する合理的精神の発芽によるという説明がなされるのが普通であるが、しかし東洋の場合、同じ状況のもとに同じパターンが生まれてないからである。東洋に於ては《道》における如く存在の始源―根源は知的探究の対象にはならず、それは「包むもの」であり、対象化されえないものであつた。

今、現代物理学を引きあいに出しつつ、例を老子と旧約にとって、万物の始源のとりえ方を比較してみたが、もう一つ大きな問題が残されていることを記しておかねばならぬ。現代科学に於て、現宇宙は百

八十億年前、原始宇宙の爆発以後展開膨脹しつつある姿であると説明されるが、しかしその百八十億年も「永遠」に比すれば一瞬に過ぎない、ということである。その「永遠」が西洋ではペルソナをもち、「神」として捉えられ、それへの信仰は決断と飛躍を必要とする。老子的場合、〈道〉は万物の始源でありながら存在の根源であり、われわれに即している。それ自体永遠、いわば絶対無でありながら現前しており、ペルソナをもたず、論理の対象にはならず、つまりロゴスでは捉えられない。そして〈道〉に参入するには知ではなく〈行〉による他ない、ということである。

註

- (1) 後に述べる如く、ギリシャ語で書かれた新約聖書において、既にロゴスは重要な意味をもっている。なお万物の始源については拙稿「存在の始源」(富士論叢第十八巻)があり、ここでは比較文化論の立場から、適宜訂正増補して利用させて頂く。
- (2) 莊子、天道篇第十三参照。
- (3) この現代語訳は植松、大塚共著「古事記全釈」による。
- (4) 和辻哲郎「日本倫理思想史」上巻七十六頁。
- (5) 十六世紀 Huguenots 戦など。
- (6) 玉勝間第六参照。
- (7) 老子「道德経」第二十五章、老子の解釈には異説が多いがここでは大体において「中国の思想」第六巻「老子、列子」松枝茂夫・竹内好監修・奥平卓訳による。
- (8) 「マスの法典」田辺繁子訳、岩波文庫。
- (9) 同右、二十七頁。
- (10) この部分は種々の解釈がある。例えば一は混沌未分の本体、二は天と地、三に陰と陽と和気(高亨)など。

道とロゴス(梅崎光生)

- (11) Schopenhauer, Die Welt als Wille und Vorstellungen.
- (12) Nietzsche, Der Wille zur Macht. 以上二人ともインド思想に興味と関心を示し、とくに前者は自らの哲学にインド思想をとり入れたが、理論または発想としてであって、「行」の領域にまで踏みこまなかった。
- (13) 本山博著「宗教的経験の世界」宗教心理学研究所刊、二十四頁。
- (14) 古代ヨガの理論としては五世紀頃つくられたと推定される Yogasutra がある。近代ヨガの理論は本山氏らによって推進されつつある。同氏著「ヨガと超心理」其他。
- (15) ウパニシャッド中、例えばブリハッド・アーラヌヤカ・ウパニシャッド第四章。世界聖典全集・ウパニシャッド全書一、十六頁参照。
- (16) 「老子・莊子」小川環樹訳(世界の名著・中央公論社)九十四頁参照。
- (17) 「玄覽」ははつきりしないが、一応神秘的ヴィジョンという小川説をとっておく。同右、八十頁。
- (18) 方法論については「莊子」において「坐忘」というのはつきりした形が出ているが、これについては別に論じたい。
- (19) 「バラモン教典・原始仏典」(世界の名著・中央公論社)二二六頁参照。
- (20) I. Kant, K.d.r. V. Reclams, S497.
- (21) 湯浅光朝「宇宙の探究」小尾信弥「宇宙の科学」小田稔「宇宙の探究」その他の資料による。Cosmology Theories of the Universe by Jean Charron. によると、宇宙空間はゴム風船がふくらんだりしぼんだりするようになり、周期的に大きさを増したり減じたりするという。
- (22) H. Diels, Heraclitus von Ephesos, 1909. の番号による。
- (23) G. Thomson, The first Philosophers, 1955. 「最初の哲学者たち」出隆・池田薫訳、岩波書店、三二六頁。
- (24) ドン・ボスコ社・旧訳新訳聖書の訳を用いる。
- (25) 以上、同右、新約一六一頁。
- (26) 和辻哲郎「風土」参照。